

概説： メルツァー哀悼 ～‘精神分析キチ’、その熱魂を讃えて～

山上 千鶴子

人は誰しもその生来において‘ナイものねだり’をするものではなかろうか。アルものに飽き足らず、ナイものをねだる。この心性こそがおもしろい！ それを成長に不可欠なものとして、私はむしろ肯定的に捉えている。ナイという内的衝動に牽引されて、己事究明^{こじきゅうめい}に至る。この「認識愛」の目覚めこそがメラニー・クライン言うところの精神分析の眼目である。

そこで思うことは、精神分析に携わるわれわれ一人ひとりに‘白い余白のページ’が内在しているということ。精神分析との因縁に絡めとられて、スツタモンダする、その生の軌跡のなかで、各自がそれぞれに生きて、それを埋めてゆく。ナイが自己の拠って立つべき立脚地ともなる。即ち、それがおそらく何事かやり遂げねばならないといった内的促しになるだろうから…。そして、そのパーソナル(個人的)な‘ナイものねだり’がやがて精神分析に新しいページを加えることになると考えてはどうだろうか。この意味で誰もが‘パイオニア’といっている。その先人として、ここにメルツァーを語ろうと思う。ついでにピオンについても少しばかり…。

まずは、私自身のことを語らねばならない。そもそもナイものねだりとは、己の‘無明’に由来するものなのだろう。心的コンプレックスとも言えるかもしれないが…。一つ二つどころじゃない。とても一筋縄ではいかぬ、とことん片付かないものだ。そもそも私が渡英してタヴィストック留学したというのだって、ナイものねだりだった。そしてあちらに滞在している間も、さまざまな意味で私は‘ナイものねだり’をしては煩悶を深めていったのだし。そして、帰国して以降もそうだ。むしろそれはより自覚的に深まったきらいがある。あちらで教えられたものを飽き足らないとして、それを超えた何かを求める。不遜にも聞えようが…。私にはクライン派もポストクライン派も視野の外にあった。探しものをしているつもりで、しかしその何か‘ナイもの’とは何であるのかがよく解ってもいなかった。あちらで身に付けたもの、それを全否定することは出来ない。恩義がある。義理に縛られてもいた。たくさんの人たちの思いを背負って、私は日本に戻ってきた。それは否定し得ない事実なのだから…。わざわざタヴィストック留学に行き帰ってきて、そこで身に付けたものを一旦すべて記憶から抹殺したというのも変だが、それも致し方なかった。確信犯的に私は一時‘記憶喪失’になった。臨床の現場のなかで培われてゆく、患者との交流で私が語る分析言語のなかでそれが果たしてどう生き残ってゆくか、それを見定めることになった。

タヴィでの講義中、メルツァーが何気なく語ったことで、強烈にインパクトのあった或る事柄が記憶されている。それは、何か患者に対して解釈したときに、それに対して患者から<Yeah, I think so (まあ、そうでしょうねえ)・・・>といった軽く上滑りの反応が返ってくる。それではダメなのだ…。幾らか沈鬱な面持ちで、ちょっと語気を強めて彼は語っていた。つまり患者にとって何ら‘思考の糧’^{かて}とはならない、自己洞察の契機^{はら}を孕まない分析家の解釈を失敗だとして断罪し、「不毛のセッション」と彼は言っているわけだ。そして何故ことばが届かないのか、虚しく跳ね返されるだけなのかと、挫かれて心傷^{くじ}

つく分析家としてのメルツァーの苛立ちと焦慮がここにかがわれる。それを患者側の抵抗だとか、もしくは患者の病理として説明づけることは容易なことなのだが・・・これは心理臨床に携わっていれば、おそらく日常茶飯事の事柄でもあるわけだが。ほんとうにどうしたら通じるのか、どうしたら届くのか、自分の語る言葉を模索しながら、悩み続ける彼がいると感じられた。そこに彼という人の誠実さ(sincerity)がかがわれた。しかしながら、時を経て、今ふと思う。もしかしたら、これは、実は彼自身がクラインの分析で時折こんなふうであったのではなかったかと・・・口には出来ない、言うなれば憤懣である。それで心つまづ躓くことがあったのではないか。彼女に反撥も出来ず、ただくまあ、そうでしょうねえ>とひとまずその場を無難に切り抜けた彼がいたということではなかったろうか。事実彼はクラインとの6年間の分析体験について殊更何も語ってはいない。ひたむきにクラインを思慕し、ひたすら恭順を示したふうな印象であったが・・・ピオンがクラインとの分析体験を‘トラウマ’とも称し、それを乗り越えるのに10年も掛かったと公言しているのとはいい対照だ。ピオンとも違って彼女をやぶ擲することなどない。メルツァーいうところの‘紳士教育’が身に付いているといえ、それまでだが・・・

分析家の解釈する言葉が、鏡のように患者を映し出さない。患者にしてみれば、自分が見えないままというわけで・・・言われた言葉は、自分とは‘関わりがない’言葉としてスルーしてしまうことになる。ほんとうにそのとおりだ、と私は内心深くうなず頷いた。これは私の分析体験に照らしてみても感慨でもあったのだ。分析家Miss. Doreen Weddellに語られているわたしが私なのか、どうしても違和感があった。しっくりこないのだ。私本来が奪取されたというか、もしくはどこか見慣れぬ異国に拉致されたかのような感覚だけがあった。不幸なことに・・・自分の足元の基盤が危うい感覚で、いつまで経ってもどうしても腰が据わらない。ここでいい、これでいいという確かさが無い。もしかしたら、幼少時にごく短期間にしろ伯父夫婦に預けられた過去の記憶がわざわい禍しているのかと内心怪しんだ。あのとき心の躓き、帰りた、でも帰れないといった懊悩が幼い子どもの私のなかにあったわけだが、それが今ここで反復され分析家に転移されていたとも言えなくもない。それでどうにも分析家に対してなつ懐かないままとしても、それはごく自然なこととだとも思ったが、なじ馴染もうとしたし、それなりの譲歩というか、なるほどといったことだってあったわけだし・・・それに正直なところ、分析体験を成功裏に修めねばならないという内なるプレッシャーがあったのは確かなのだが、如何せん、こんなはずではなかったとの焦りが心に疼いた。

最後の辺りでは私の戸惑いは頂点に達し、いよいよ募る徒労感と焦りで<How am I supposed to feel? ! (一体、私はどういうふうに感じたらいいというわけですか・・・)>と無然として語っていた自分がいた。考えることでは所詮及ばないにしろ、自分がどう感じるかといったことまで指図されるのかと。ここまで混乱していいはずもなからう。私は私のものであり、どこか私が私ではない別の何か誰かになる、それが精神分析の目指すものであるなど認めることなど到底出来やしないわけで・・・

ここで或る一つの洞察を得た。当時タヴィでの訓練生で私の後輩になる或る女性がいた。サリーといった。南アフリカ出身とか。私のアナリティカル・シスター(analytical sister)になる。即ち同じ分析家Miss. Weddellに教育分析を受けていた。どういふことだったか、向こうから私に声を掛けてきた。

そして声を落として、<もうね、Miss. Weddellのところに行くのが怖くて怖くて・・・>と私に打ち明けた。一瞬驚き呆れた。日頃タヴィで皆の集う場でズバズバと物を言う彼女を何度か見かけていたし、どう見ても神経の図太い、デリカシーなどまるで無いみたいな印象なのだったから、私はそれを聞いてとても意外だった。だがすぐさま、<それは、あなたが権威におもねる向きがあるからでしょ・・・>と内心呟いた。彼女には言えなかったけれど・・・。南アフリカでのアパルトヘイト政策は、白人である、つまり加害者側にいた彼女にとってもトラウマであるに違いない。それはおぞましい悪夢であつたろう。有色人種(おそらく私も含まれていただろうが)に対する偏見やら蔑視はそのからだに滲み付いていた。だが同時にその白人社会のなかになんて、同様の見えない差別はあつたろう。彼の地で黒人の乳母に育てられたという或る人から、その乳母への愛着がゆえに自分が白人であることを憎んだといった話を聞かされたことがあつた。彼の地での差別構造は決して一筋縄ではゆかないのである。そして知らずにサリーもまた、逆差別といったトラウマを背負っていたのだらうし。だからこそ、どこに行っても自分の拠所として何らかの権威に敏感にならざるを得ないし、それへの帰依・恭順こそが生き残りの要といったこと。だからこそ、Training Analyst のMiss. Weddell にすら恐れおののいたのだとしか考えられない。確かにタヴィストックとの繋がりさえあれば、Training Analystがタヴィの訓練生についてある種の権限があるということは察せられる。本来気弱な私が、そんなことにまるで頓着することはなかったのだから、むしろ笑える。サリーは私にとって異人種であつた。親しく交わることが出来たら、いろんなことを話せたのに・・・。惜しかった。でもあちらは飽くまでも此地で生き残ろうとしている人であり、私は此地では‘よそ者’で用が済めば去ってゆく人なのだ。遠慮しておくのが無難だらうということで彼女にはそれ以上近付かなかった。

だが、自分一人のことだけでは見えなかった或るものが見えた。己の分析体験について、相対化する視点を持つきっかけともなった。何のことはない。私は私の、サリーはサリーの、幼少時以来の内なる心のスツタモンダ(自己相克)をMiss. Weddellにそっくり投影していた。分析家というのはそんなふうに‘使われる’ものだとしたら、まったくのところお気の毒ではないか。分析の場が本来そうしたものであり、それこそ‘反復強迫’だとしても、それだけで済ませていいはずもなかろう。だから彼らは徹底操作(work-through)と言うわけだが。私がMiss. Weddellを私の投影のために‘使っている’ということ。いい意味でも悪い意味でも・・・、それは飽くまでも私の本来性が‘自発自転して’ゆくことになるために・・・。そのきっかけに過ぎないということ。だから彼女に対してこの‘ごねまくっている自分’は許されるんだというところに落ち着いたと言える。だが・・・。本当にそれだけかという一抹の疑念はあつた。彼女は、‘牙を剥く私’を内心面白がっていたのかも知れない。おとなしい気弱で内気な愛らしい私が一皮剥けるという意味で・・・。だが、決してこれはフェアではないのでは・・・。飽き足らない思いがした。どういう意味であれ、檻のなかに閉じ込められ、牙を剥き、唸り声をあげる手負いの猪いのししみたいな心境であることが嬉しいわけもない。この窮屈さには辟易した。

どのような心の闇を深く穿つうがとしても、そこに一筋の光が照らされねばならない。そこには未来への飛翔を夢見る心が欲しい。そこに差しのべられる手を(言葉を)私は希求した。つまりのところ、自分の

中の「幼い子どものわたし(infantile part of myself)」に拘泥するだけでは飽き足りない。もっと「おとなのわたし(adult part of myself)」が発掘されるべく言葉を聞きたがった。あまりにも関心を向ける領域が狭い。視野狭窄ぎみというか…。夢分析そして転移解釈。それだけで週5回のセッションが5年近く続いたわけだ。彼女の個人的な事柄は勿論一切語られなかった。職業人としての背景についても何ら知らされない。体験された臨床の事例すらも一切聞かされることはなかったわけで…。それに、日本にいる両親のことを尋ねられたことは皆無であり、私の日本での幼少時の記憶を物語ったという覚えもないのだから、一体何が分析されたのやら…。私は、人間味のある語らいを心底欲した。

そして私は、彼女に身を委ねることが出来ないと思った。分析家を他の誰かに換えたかった。だが、マーサ・ハリスは私の思いをMiss. Weddellにそのままぶつけなさいと言うばかり。ジョン・ブレンナーは私に、チズゴはセラピストとして優秀であるのは間違いないとしても、このまま優秀であり続けることが保証されるとは限らないとして、分析家の交代には難色を示した。懇々と私を諭す手紙を彼から貰った。それにもまるで私の心は動かされることはなかった。困り込まれていた。逃げ場はないと観念した。瞼に母親の悲しげな顔が浮かび、踏みとどまった。そしてMiss. Weddellの許へ戻ったのだ。ただただ自分の未熟さが恨めしかった。己がまだまだ粗削りな人間であることは重々承知していたのだし…。私は彼女に「I shall forgive you(わたしはあなたを赦す)…」と言ったのを鮮明に覚えている。どういう脈絡でそれを言ったのか記憶を辿ることはもはやできないが…。つまりのところ、それがあなたの精一杯ならば、致し方なかろう。わたしの‘ナイものねだり’なのだろうから、諦めましょう…といったこと。ここでひとまず私の‘ナイものねだり’は棚上げされることになった。

彼らの‘伝統’を擁護するということでは強固な砦といったふうを感じ取られた。私は内心疎外感で打ちひしがれていたのは事実だ。私はタヴィストックの修了書など要らないと思った。だが、誰もが私を今ここで失うわけにはゆかないという思いで内心大いに焦っていたともうかがわれた。当時の私の身に起きた、言うなれば‘分析家への抵抗’といったこと、それなど誰もが身に覚えのある、誰もが皆辿ってきた道でもある。であるからして、私への同情は禁じ得ないとしても、分析への懐疑をおおびらに口にするには出来ないといったふう感じられた。それでこれ以上騒ぎを起こしたくない私は矛を収めたわけなのだ。あの当時、確かに分析家で日本人のトレーニーの分析など引き受けてくれるような酔狂な人がMiss. Weddell 以外にいたのだろうか。居たとしても私は自分で探せないのだから、それも無理。とにかくマーサ・ハリスもジョン・ブレンナーも私の成長を見守ってくれていた。そしていつか「一皮剥ける」ことを期待したともいえる。その彼らの期待感を素直に信じられたらよかったのだが…。

何よりもこのスッタモンダの渦中であって、私の担当するセラピイの症例が中断されることは避けねばならなかった。確かにそうなのだ。私が担当する症例は私の勝手にしていいものではなかった。それらはタヴィストックやらセント・ジョージ病院に帰属し、指導教官のマーガレット・ラスティンやら私の直属の上司のジョン・ブレンナーの責任下にあったわけで、その彼らの指導下に訓練生としての私はいたことになる。他に幾つかメルツァーに個別に指導を受けていたにしても…。それは同じこと。それらの子どもらの

症例を簡単に途中放棄して帰国などできないのは重々承知していた。そしてパーソナル・アナリシスが
ないところでは進展もないのも道理だろうというも彼らの言うとおりなのだ。そして、やがて分析に戻り、
いつしか私自身も、転移状況に徹底して根ざし、そこに限定付けて解釈する手法をものにしていった
ことになる。

だが、私は帰国後、持ち帰ってきた症例のファイルを開けることが出来なかった。何やらどこかで子
どもらにすまないと詫げる思いがあったから・・・。一抹の懐疑があった。そこにはセラピストとしての私は
本当に存在していたのか否か。彼ら一人ひとりに私は、私自身を、そして私の愛を真実与えられたと
言えるのかどうか。それとも、タヴィストック・トレーニングのトレーニー、すなわち単なる彼らのエピソード
ン(操り人形)でしかない私であったのか。そして彼らを単なる稽古台にただけではなかったのかと・・・。
蓋を開けるのが怖かった。そしてつい最近のこと、あれから40年経ようとする今にしてようやく一つひ
つファイルを開けた。そしてそれらをまとめてWEBサイトの「児童分析の実際」に症例として10名の子
どもを載せることができた。一人ひとり抱きしめたいような懐かしさが蘇った。そこには私の杞憂を超えて、
それぞれが‘分析の子ども’として息づいていた。そして私が安堵したのは、殆どの症例について私が
総括レポートを書いていたこと。それらがファイルの中に残っていた。その書かれた日付は1979年9月
30日であった。つまり帰国したのは10月で、退職したのは9月いっぱいだったはずだから、ぎりぎりまで
どの子についても総括レポートを書き、それを帰属先に提出して、そのような形で締め括って彼の地を
去ったことになる。私はケースを無責任な形で投げ出さなかった。きちんと責任を果たした。それを確
認できて、どれほど安堵であったことか。あれらを誰かが読んでくれたかといったことなど考えても見な
かったが。Mrs. シャーリー・ホクスターが私の帰国前に私にタヴィストックからの推薦状を手渡してくださ
って、そこには私が特に幼い子どもとのセラピーにおいては卓越した技能を発揮した旨のことが書かれて
あり、あーっ、どうしてかしらと思った。多分今思うに、おそらくは「症例メアリー」についての私の報告書
をお読みくださったからだろう。

ピオンの或る論文のタイトルに、「Making the best use of a bad job」(1979)というのがあるんだそうだが。これは分析家と分析患者との出会いのなかで突発する情動的嵐 (emotional storm)と彼が呼ぶところのものについて語られていて、これは敢えて訳せば、「このとんでもない、訳の
分からぬもの。それを可能な限りせいぜい訳の分かるものにしてゆくことでしかない」といったことだろう。
そもそも分析家だって最初のところさっぱり何が何だか分からないわけで。でもそこで尚も分析家が揺
るぎなく考え抜くだけの姿勢を貫こうとするならば、やがて何かが、或る種のパターンが見えてこよう。目
の前の混沌ひるに怯まずに、敢えてそこに意味ある筋立てを果敢に見極めてゆくことが肝腎要となるとい
ったこと。これはいい！あの当時、そのように語ってくれる人がいたらよかった。おそらく言われていたのだら
うが。それがそうだと知るには、誰かに言われて分かるのではなく、いつしか自分で知る以外にはなかつ
たのであろう。ピオンのいうところの「Learning From Experience」ということはつまりそういうこと。ここから、
‘親なる人’をとことん踏み台・叩き台にすること、それが‘子どもたる者’の務めでもあるといったことが
私の持論ともなる。それでお互いに‘為になる’ことだってあり得るだろう。くんずほぐれつの取っ組み合

い。せいぜい叩かれ強くなりたいものだ。だから付き合わせる^{きずな}こと、付き合うことから背を向けてはならない。自分を諦めないために。生きている限り、自分との絆は捨てられないのだ。それこそが手離してはならないもの。

メルツァーがまた、こんなこともどこかで語っていた。メラニー・クラインがほんとうのところ自分をどう思っているのか、ついぞ知ることはなかったと…。これは何だろう！そこに一抹の寂しさが、そして苦々しさすらも微かにうかがわれる。彼もそうだったのか。私もそうなのだと改めて思った。分析を受けるといことはそんなものなのか。人と人が出逢って、毎週4回5回会うなかで、それでもパーソナルな感情を吐露するということが禁じられているということ。それではあまりに惨^{むご}くはないか。對他者にとりだけではなく、分析家本人にとっても…。Miss. Weddellが不感症だったり冷感症であったはずもなからう…。だが、彼女個人のこと、その経歴も、Cassell Hospitalでどうやら総婦長といった要職にあったとか、一切語られてない。生活面においては勿論のこと。どうやら日本人のオペアの女の子が同居していたらしい。そんなことなんてまったく聞いていない。たまたま上の階の人が通りがかった私に間違っ^{まちが}て配達されたからと日本からの封書を手渡したことで判明した。真偽のほどは不明だが。なぜ彼女が分析家になったのか。それだって知らされていない。マーサ・ハリスから紹介があったときは、私が彼女の分析を受けることは決まっていたのだから。メルツァーはメラニー・クラインを自ら選んだ。その結果がどうであろうと、悔いはなからう。だが私は違う。始まってしばらくして、徐々に事態が掌握されるにつれ、慌てふためいた。だが、もはや手遅れで、まるで身動きが出来ない自分がいた。彼女は、メルツァーの自閉症研究グループの一員でバリーという名前の子どもを担当した。その記録は歴大なもので、尋常ではないセラピイの記録は実に圧倒される。そこで強調されているのは、彼女がバリーの攻撃やら誹謗に対して断固として揺るがない、不撓不屈であったといったこと。私に対してもそうであったということになろう。でも私もまた、メルツァーのように、彼女が私をどう思っているのか、ついぞ知ることはなかったといわざるを得ない。それで事は済んでしまった。ところが、その数年後のこと、私が帰国して原宿に落ち着いて間もない頃に、突然舞い込んだ彼女の直筆の手紙には心底驚いた。そこには判読しかねる筆跡で、私に対してくあなたのこれからの疾風怒濤の人生を勇敢に生き抜かれるように…>といった内容がどうか読み取れたわけだが。何で今更こんなことを言われなきゃなんないのかと訝しく思いつつも、くあらまあ、なんだ！あなたは私のことを知っていたんじゃないですか！>と一瞬思った。何の未練も覚え、そのまま破棄した。それを忘れた頃に、サリーからMiss. Weddellの訃報の知らせが届いた。彼女は移転先のオックスフォードであっけなく身罷^{みまか}った。サリーはオックスフォードでのMiss. Weddellの葬儀を知らせて寄越したのである。それで私が彼女から手紙をもらった事情、死の床で彼女は私への思いを伝えたかったということがようやく飲み込めたわけだ。だが私は何ら心を動かされなかった。むしろ何やら腹立たしいような…。Miss. WeddellはDr. メルツァーを追ってオックスフォードに移り住んだと思われる。でもメルツァーは生来‘ボスたる器’ではない。飽くまでも‘単独者’であるのだから。彼に従うことに彼女の未来にどんな目算があったのか。私は訝しく思いつつも、それでどんな誤算ゆえに彼女は其の早すぎる死を迎えたのかと…。それが悲しかった。間もなくタヴィストックから、Cassell Hospitalでの功績を称えてMiss. Weddellを偲ぶ会を開催する旨の案内状が届いた。勿論参加しなかった。

今更彼女について知ることなぞ興味を覚えなかった。解けないままに彼女に対するしこりが残っていた。でもこの彼女が犯した‘掟破り’からうかがわれたのは、彼女の眼に映っていた私。そこには確かに彼女と共にした私というのは、もはやかつての愛想のいい、人好きのする (docile) 性格だけの私ではなかったということ。私の本来性において、案外にもどうやら剛直な面がなくもないこと、それを彼女は覚えていた。私の母親が、いつだったか、<チズゴは内気だからねえ…>と心配そうに語っていたのを覚えている。そうなのだ。気が優しいというか、私は内気な子どもだった。昔々の話だが、小学校入学の初日、教室で黒板を背にした先生に次々に子ども一人ひとりが名前を呼ばれて席を立ち、何かを手渡された。私が自分の席に戻ってみたら、なんと別の子どもが私の座席に座っていた。勿論間違っ。私はそこに立ちすくみ、机の上の自分のランドセルを見つめながら、でも何も言えず、涙ぐんで呆然としていたということが思い出される。母親はそんな私を気遣っていたのだろう。その当時からいつも優等生で何かというと先生には褒められるということばかりではあったのだが。そんな内気さをいつかかなぐり捨てなくてはならない、そう思っていたわけでもなからうに。いつしかまるで追い詰められた‘手負いの猪’^{いのしし}みたいに、牙を剥いて反撃する自分になっていた。でも結果的に見れば、あの分析体験は、ホクスターの言っているように私のなかに‘バックボーン’^{つちか}が知らず知らずに培われたと言わざるを得ない。それがたとえそのように仕組まれたことであつたとしても。私が選び取つたと思えたら、それでいい。それで私は私で良かったと、そんなふうに‘本来性の私’を取り戻せたのだとしたら。

私たち精神分析家は、一体どういう人を創造しようとしているのかを思ってみる。そしていつかその創られた人としての分析患者の成長に分析家が己の労が‘報われた’と感じるといったこと。それを断然諦める必要もなからう。ここにピオンの「夢想」が意味を持つ。「Becoming O」といったこと。この場合、‘O’とは真実とか至高性といったことらしいが、いかにもプラトン主義者らしい。むしろ私は、己の本質性に根差した真価(値打ち)というものを想定している。つまり己の本来性に立ち還ることが精神分析の眼目と考える。己が己自身にとって‘贖いの器’になるという意味で。

私は、メルツァーが対談のなかで、自分の本来あつた人好きのする (nice) 性格というものが教育分析を受けたお蔭ですっかり根こそぎになつたという話をしているのを聞いて、ギクツとした。彼もそうだったのか。私もそうなのだ。胸が痛んだ。分析開始頃の私は、ニコニコと笑顔の耐えない、実に愛想のいい、誰もが人好きのするような感じの女の子であつた。それが時を経て見事に変貌した！ニコリともしない、心が頑なに強張り、冷えていた。自分の周りの誰彼を見ても、もはやそれらのいのちに触れている感じが失われていた。どちらかという社交的で、キラキラしていた私は姿を消した。全体に容貌も変わってしまい、くすんだ翳りに覆われてしまっていた。皮肉にも私は私にとって‘憂慮すべき人’になっていた。そのまま私は帰国した。だが、やることはやつたのだと意気揚々とした気分もあつたのは事実だ。しかしながら両親に会つたとき、私は自分の心の冷やかさに呆然とした。自分はいつか‘人嫌い’になっていた。自分は一体自分に何をしてしまったんだろうかと訝しく思った。そして、あの分析は失敗だったと。自分が許せなかつた。そこからの立ち直りに多くの時間が掛かつた。原宿に居を定める前に2ヶ月ほど舞鶴の実家でしばらく池の中に穏やかに泳ぐ錦鯉の姿、その水面にゆらめく波紋にただただ

見入っていた。そのまま私は何時間もまるで銅像のように動かない。そんな私を目にして、母親はちょっと呆れたふうに笑うことがあった。遠くから私を気遣う、そのまなざしを感じていた。そんなふうに、両親を支えとしながら…。いつしか疎遠な感覚にどうやら親しみが戻ってきた。大きな安堵だった。私は、本来‘誰かの子どもであることの幸せ’を、そして‘人の親であることの嬉しさ’を知ることこそが人として生きることの生き甲斐だと信じていた。それに^{てこ}挺入れしてくれるもの、それを探し求めていたはず。それこそが精神分析だなど、どうしてそんな勘違いをしたのやら…。恨めしかった。

それから原宿に居を移してからのこと。私は、もはや仕事は二の次に、まず自らの‘人嫌い’を矯正することが始まった。人中へ積極的に足を踏み込んだ。「全国野鳥の会」の会員となり、双眼鏡を手にしてあちらこちらへと探鳥に実によく出掛けた。傍らの見知らぬ仲間と同じものを見、同じものを聴いている。ただ嬉しかった！「野田地方史懇話会」の石仏サークルの面々とも一緒に千葉近辺の石仏巡りをした。野仏はもはや形は摩滅して崩れかかっているのに、その顔にはかすかに微笑があった。こころ慰められた！信州の奥深い村落での「霜月祭り」に体験ツアーで赴き、参加した。夜を徹してお囃子やら舞が披露される。その舞台裏で裏方さんらと一緒に^{まかな}賄いのお手伝いをした。竈の薪が赤々と燃える土間で、包丁を片手にジャガイモやらニンジン^{かまど}を切り刻みながら、人々のざわめきとぬくもりに浸っていた。隅田川花火大会には一眼レフカメラと三脚を携えて撮影に出向いた。花火が夜空に炸裂する。川縁の見物客がワーンと歓声を上げる。私も負けずにワーンと声を張り上げた。そして、佃島の盆踊り。広場が^{やぐら}櫓から渡された提灯の薄明りに照らされ、老いも若きも入り混じっての踊りの輪がゆったりと揺らぎ動いてゆく。いのちの列なりをみたような…。「喜多能楽堂」にも足繁く通った。観客の一人であることに深くつろぎを覚えた。日本青年館の「全国民俗芸能大会」にも毎年参列した。御神楽が大好き！お囃子に乗って、^{たもと}袂を翻し飛んだり跳ねたり、その舞台に魅入った。こころが和むということ。それを私は知った！それから、近くの「鳩森神社」の節分祭の豆撒き、そして餅つき大会にも出掛けた。人が笑っている。自分も一緒に笑っている！身内に凍りついていた‘よそ者意識’が解けてゆく。それがどんなに安堵であったことか！こうして昔ながらのよく笑う快活な私が戻ってきた。

そしてこの間、実に私にとってこころの拠り所となったのが私の記憶に刻まれた‘自由闊達で元気な男の子’といったメルツアーその人なのである。私はホクスターのように彼を自分などの足元にも及ばないお偉い方と畏怖するなど思いも寄らなかった。当初から何だかマーサ・ハリスの懷に抱かれて庇護されている‘やんちゃ坊主’といったふうには私を捉えていたのだから、ちょっとした怖いもの知らず…。彼が気安く語る無駄話に時折内心クスクスッと笑う自分がいたり…。帰国後、その記憶に助けられ、私はその‘内なる元気な男の子メルツアー’に牽引されていったように思う。彼が私に語ったところの、<精神分析を謎解きと考える人がいるが、その一方で植物を育てるように、日に当てたり水遣りをしたり、時には肥料を与えたり、そんなふう^{かまど}に育てることを精神分析と考える人がいる。自分は後者だと…>、その言葉を信じた。私は心底育てられたかった。育ちたかった。そして今や私はわが手の内にあった！私次第というわけ…。

彼が対談で語るように、分析のなかでいかに‘人好きのする(nice)性格’が奪われたかということ。確かにそうなのだろう。かつてはナイーブで愛嬌のある、人懐っこい彼がいた。例えば、アメリカを去るに当たり、分析家に別れの挨拶をしに行った際、涙が溢れ出てろくに喋れずに終わったんだとか…。それがやがてとんでもなく別なものに変貌した。おそらく‘shrewd(すばしこい、抜け目ない、鋭敏な)’といったことではなかろうかと推測される。それが勿論メルツァー本来に備わっていたものであったともいえようが…。言うなれば、それは剛直さ、でも融通は利かないかも知れない。それは決して自分に都合のいいように考えないということであろうが、同時に相手に都合のいい自分になるなどさらさら考えないといったことでもある。だが、やはり私は思う。彼の‘人好きのする性格’が根こそぎにされたわけでは決していない。私が彼に見たものとは、案外にも、その「本来性」ともいえるナイーブかつ闊達な‘元気な男子’なのであり、それこそマーサ・ハリスが愛したものではなかったかと私は思う。私の場合幾らか彼とも違うにしろ、また似たような意味で何かしら変貌を遂げ、そして再び私は‘本来の自分’に立ち還ったと言えるのかもしれない。プロ仕込みの規律、そして個としての自律性・独自性といったこと、それらはどのように相克し、やがて止揚されてゆくものか…。だが、所詮己の本質性・本来性とは根絶やしにされることなどあり得ない。むしろ精神分析とは、どうやらそれに拮入れするものようである。

ここでピオンについて話そう。彼の最晩年の著作『A Memories of the Future』のエピローグ(P.578)に、次のような文章が載っている。胸を打つ！

私は、生涯を通してずっと、常識とか、理性分別、記憶、願望によって始終が感じがらめに縛られ、不自由で窮屈な思いに苦しめられてきた。それはまるで檻の中に閉じ込められているみたいで、絶えず欲求不満で苛立っていた。とりわけ最も厄介至極でゾツとするのは、理解することとか理解されることなのだったが…。本書が書かれたのはそもそも、まさにそれらすべてに対して私の反抗心を表明し、金輪際それらとは縁を切り、ここで敢えて‘グッドバイ！’を言う、そうした試みなのであった。…… [訳; 山上]

その諧謔の限りを尽くして、さまざまに自己を分解し、それら片鱗をばら撒いて、さらに互いに乱反射させながら、その複雑怪奇な彼の人となりの舞台裏を‘生きたドラマ’としてわれわれに見せてくれたといったことになるらしい。それも、<相変わらずただもう訳わけの分からぬ事柄を無闇に喋り散らかしただけに過ぎないわけだが…>、と彼がちょっと言い訳しているのが愉快だ。さもありなん！ 幼少時の頃から彼は母親から<ほんとにまた愚にもつかないことをごちゃごちゃ言って…>と取り合ってもらえなかったし、父親からも、お喋り好きな息子に業を煮やして、<お前、ちょっとは口を閉じて、黙っていたらどうだ>としょっちゅう小言を言われていたようだ。だが、ピオンが口を閉じたらピオンではもはやなくなるわけで、一緒にバカ笑いに興じる仲間がどんなに欲しかったろう。誰もいないから自分一人でやったといったふうだ。それで分かれようと思われまいと頓着せず、とことんどうにか言うだけは言った、気が済んだ、これで本望だということに至るまで喋り続けるしかなかったのだろう。そしてここに彼の‘本質性’が貫か

れており、だからこそ深い安堵感が伝わってくる。われわれもかくありたい！〔ちなみに、彼の地でのエスタブリッシュメントからは、おふざけが過ぎますということなのでしょう、この著作はまったく無視されているようだが・・・！それも想定内のこと。むしろ愉快ではないか！〕

ここで夏目漱石の英詩、その在英中に書かれた一篇《Life's Dialogue》が連想された。クレイグ先生にそれを見せたら、支離滅裂(incoherent)と評されたのだとか。だが、それはバイロン卿にも似て、「近代自我」の息吹きに溢れ、気概と熱情が漲っている。「自己本位」の萌芽がそこに兆している。その骨子は明瞭だ。「生きる」とはすべからく‘自分ごと(personal-matters)’なのであるから、とことん「我」に執せよ、断じて手放すな。さまざまに糾^{あざな}われた‘内なる因縁’に更なる燃^よりをかけよ。言葉を与え、かつ語らしめよ。斯くして「主体」を紡^{つむ}ぎ出せというものだ。これはピオンにも一脈通じる。総じて「精神分析の眼目」とはこうしたものだろう、と私には思われる。

これとは別に、漱石はまた、子規の俳句論に抗してだが、こんなことも言っている。＜狂なる哉狂なる哉、僕狂にくみせん。・・・平日の文章、こころを用いざるにあらず、装飾なきにあらず、ただ狂の一字を欠くがゆえに人をして瞠若たらしむるに足らず。・・・ああ狂なる哉狂なるかな。僕狂にくみせん・・・＞と。作家としての漱石の立脚地とは、そもそもそこに執し、とことんその弱点ともいうべき、だが‘もっとも内なるわたし’というマグマを掻き回して、その結果、自らが狂わんばかりに翻弄され、周囲をも巻き添え食わしながら、七転八倒する、そうした自分の姿を叙述し、‘筋立てる’ことでしか、己自身の救済はないと観念するに至ったということではないか。ここに近代作家・夏目漱石の秘密がある。懺悔^{ざんげ}の書とも違うかもしれないけれど、その書かれたもので、漱石その人の根^{から}っこに絡み付いた‘因縁’故に生み出されたものでないというものは一つもなかろう。その本質性を徹底して貫く姿勢が実に小気味いい。ごまかし・騙^{だま}しといった欺瞞に対して身震いするほどのアレルギー反応がうかがわれる。それはピオンにも重なるという意味で、このお二人は、われわれにとってなかなか得難い。

さて、話しを私の‘ナイものねだり’に戻そう。実際のところ、それは‘掟破り^{おきて}’ということになっていった。日本での心理臨床の場で、やがていつしか私は聞きなれない言葉遣いをしている自分に気づいた。＜～～であればいいですね＞という言い回し、それを彼の地では聞いたことがなかったし、自分が使っていたはずもない。帰国後数年経た頃だが、いつか自分がそうした言い方をしていることに気づいて、アレッと驚いた。その日本語がごく自然に口から吐^ついて出た。それがしっくり来た。それから、近頃では、時として＜ブラボーではないですか！＞といった言い方をすることもある。こうしたことも向こうでは決してあることではない。しかしながら、案外‘掟破り’とも言えないかもしれない。ピオンの言うところの、積極的な投影同一視(positive projective identification)といった概念にも一脈通じるものがありそう。それを積極的に大いに活かしているといった見方もできなくもない。とにかくなんとしても、相手に言葉が届くことが肝腎なのだから・・・。＜あなたは・・・＞と語りかけ、呼びかけることに徹したと言える。自己開示も大いにした。私のWEBサイトも積極的に活用し、私の経験、そこから何か学ぶものがあれ

ば、よろしければどうぞあなたもと誘いかけを辞さなかった。その点で、私はいわゆる受け身かつ中立的な (passive and neutral) 精神分析家では断じてなかったわけで・・・。

結局のところ、それまでにその人に一体何が起きたかを知る術などない、だから今・ここという転移解釈でしか了解できないことは敢えて言及しないといった偏頗な視点ではなく、その窒息せんばかりの息苦しさをぶち破り、その人の生きてきた現実(内的・外的)だけではなく、その人のこれから生きてゆこうとする現実(内的・外的)へと拡張されてゆく。あっちこっちへと目配りに忙しい。活気付く。転移・逆転移関係に自らも一緒に生きているし、生きてゆくことを信じられるようになっていった。折々に私を育ててくれた詩歌・小説のことも、そして影響された思想家たちのことも、いろいろ交流のあった人達、親も含めて、自由に語る私があった。勿論のこと、分析患者の転移と切り結ぶ私の逆転移に内的に導かれていると思いたい。事実それら一見‘無駄話’が案外ヒットして、患者にとって思いがけない連想のきっかけになることがしばしばあったのだから・・・。私が一皮剥けるとといったことがそういうことであったのか、今ならそう思える。

内的現実も外的現実も私の中で乱反射して留まることを知らない。どこで何をみたのか。それがどのようにして私の一部になっているのやら・・・。錯綜してる。でも、それがよりいっそうリアルに思えた。カメラを趣味にし始めてから、多重撮影に興味を覚えたのは、そうした故だと思われる。心の闇を照らす言葉の光、それからの連想の糸が手繰られてゆくことで複雑怪奇に見えてくる世界。そこから、「知って知らない、知らないで知っていたわたし」が「わたしを知る」という自覚へと繋がってゆく。

ここで私が信 (faith) を置いたのは、一人ひとりのなかにある「自証的覚知」ということ。一人ひとりの自らを証せんとする認識愛的衝動、西田幾多郎いうところの‘自発自転する自覚性’といったことに俄然注目した。「自己に於いて自己を映す」、そのころの働きこそが私を魅了した。私はそれにただ寄り添うことであり、そのためにはその自発自転する自覚へと自ら‘映す鏡’として働きかけてゆくこと。それだけ・・・。「分析の子どもたち」とことん信頼するスタンスとなる。＜ああ、なんて凄いの。あなたはそんなふうに分を知っているのね。そんなにも自分を導くことだって出来るのね＞と感嘆しながら・・・。そもそもそれは児童分析の現場のなかで培われた感覚である。特にメルツァーに教えられたというのも違うのだが、しかし振り返って思うに、此の点においてやはりメルツァーほどに卓越した人はいなかったといつていいし、ホクスターの論文からもそれがうかがわれる。雑多で混乱を極めた事象を目にして、そこに概括的要旨を掴み取り、概念を紡ぎ出すことのできる理論家、そこにメルツァーの真骨頂はある。だが、それ以前のこと。自らを証せんとして獅子奮迅する「分析の子ども」に熱中している彼。おもしろい！すごいじゃないか・・・と、一人ひとりに寄り添いながら・・・。そのほとばしる熱情こそが要諦なのである。私のなかで、それだけが残ったと言っていい。飽くまでも私の精神分析を擁護するよりどころとして・・・。この熱情、それが奪われない限り、私の内で、メルツァーを始めとして彼の地で出会った人々との‘契り’は今尚生きていたい。

だけど、おそらくそれだけでもない。クライン派の言うところの抑うつポジションへと牽引してゆく、その場合に「^{やま}疾しさ」という点が強調される。その点がどうやら私の独自性らしい。これが案外彼の地では取り沙汰されていない。盲点であると思う。それは人間としてヒューマンであるということの条件であろうとむしろ私は思っているわけで。とことん己の無明、つまり愚^{おろ}かしさに躓くこと、油断ならぬものとして己を見据えるまなざしを忘れないこと。そして、それをしっかりと抱える心（‘^{おろ}こころの握力’）が身に付いてゆくことを私は願う。

メルツァーは、『クライン派の発展』の緒言において、彼自身にとって生涯「精神分析的結合対象」が自らのうちにおいて磐石かどうかが問題なのだと語っている。彼の言葉でいえば、その内的対象が健固であるか（success）もしくは脆弱であるのか（failure）が問題だということだが。この言葉を信じよう。だが、ここに使われている failure という言葉が痛く気になる。内的対象が文字通り‘失敗している、しくじっている’とは、彼の場合何を考えていたのだろうか。これって、つまりのところ己が己自身に‘^{そむ}背く’ということではなからうか。‘内なる声’に聴く耳を持たないといったこと。メルツァーの晩年において特に、^{ゆる}「赦すこと・^{ゆる}赦されること（forgiveness）」が重要視されているようだ。彼がどのような意味合いでそれを希求したものが、それも判然としない。この点、講演などでも論議が全然噛み合わないまま。だが胸に迫るものがある！どれほど油断を怠らないにしろ、われわれはとことん己の愚^{おろ}かしさに足を掬われ、己自身に背くものなのだから・・・。その疾しさ、そして救い難いわが身に、その^{ゆる}赦しを機縁として内的対象が^{よみがえ}甦るといったこと。究極にはそこに信（faith）を置くことでしかわれわれは生きられないといった諦観に尽きる。そして無明の闇に光を照らすこと。その導きに守られて、＜あなたにはあなたが見えますか、あなたはあなたを生きていますか＞と問い掛けてくる声をひたすら聞き続けてゆくことなのだろう。

メルツァーは、2004年8月13日、オックスフォードの地で逝去した。その葬儀の場で義理の娘であるメグ・ハリス・ウィリアムが追悼文を読んでいる。その最後にこんなことが語られていた。＜精神分析の実践には何も特別の知能（intelligence）など要らない、そのように彼は真実こころから思っていました。精神分析とは、‘他の人々に何かをしてあげる（doing things to other people）’といったことではないのです。そういうことではなくて、もしもあなたがじっくりこころ静かに耳を傾けるならば、あなたの内なる母親そして父親の‘奇跡’が、そしてそれらが内に抱えるありとあらゆる知なるもの（knowledge）がただもう向こうからあなたの許に訪れてくれる、その意味で‘^{おろ}こころの安らぎ（state of rest）’なのですと、そのように彼は語っていました。＞ この証言は貴重だ。もう一つ、これに加えて娘婿のエイドリアンの証言がまた嬉しい。＜私は彼に、あなたの内なる力を一体どこから得ているのかと問うたことがあります。それは‘内なる対象への信（faith in my internal objects）’からだ、と彼は応えました。すなわち彼は、自らの内なる世界に内在する善良なるものを信じていたということになりましょう。こうしたことから彼の信念が育っていったわけです。それで、もしもあなたが人々を信じるならば、それは彼らのなかの最良なるもの（the best）を引き出すということにもなりましょう。・・・＞ これもまたいいではないか！これからも私はメルツァーとの語らいを続けてゆくことになろう。そうであれば嬉しいけれど・・・。

最後に、この「メルツアー哀悼」の文章のサブタイトルに「精神分析キチ」、その熱魂を讃えて」とした理由について語ろう。まずその一つ、遠い昔のことだが、新宿朝日カルチャーセンターで「旧約聖書のかんどころ」という講座を受講したことがあった。講師は高木幹太牧師。彼は問うた。＜信仰というのはどのように伝わってゆくものか、皆さんお分かりでしょうか＞と。そして、続けて＜感動をとおしてなのです！＞と彼は語った。ああ、なるほど！と私は頷いた。信者になるということは、イエス・キリストへの感動に我が身が刺し貫かれるといった体験が要るのかと・・・私にはそれは到底無理なことだとして、では精神分析についてはどうだろうか。自分の内側に‘感動’があるや否やと探ってみた。答えは YES であった！そしてメルツアーの顔が脳裏を過ぎった！

そこで連想されることがもう一つ。錦鯉の愛好家の仲間うちでは‘鯉キチ’という言葉は誰もが知っている。つまり‘鯉キチガイ’というわけ。私は彼の地であちらの錦鯉愛好家たちが集う「The British Koi-keepers' Society」の会員との交流があった。彼らにその話をしたのを覚えている。彼らはひどく喜んだ。誰もが‘鯉キチ’を自認し、相好を崩す。ウフツツ・というわけ。そしてそのことを忘れていたのだが、帰国後何年か経って、或るイギリス人の錦鯉ディーラーが自分のWEBサイトのアドレスにこの‘koikichi’を使っているのを目にしてびっくりしたことがある。そしてこの‘koikichi’はどうやら彼の地では今や‘koi-crazy(コイクレージー)’というふうに広まっているらしいことが最近分かった。それを言うときの大の男が、ちょっと照れくさそうな、得意満面を押し隠すような、あの笑顔は何だろう！そうなんだ、自分は錦鯉にクレージー(狂ってる)なんだよと自嘲しつつ、それが嬉しくてたまらない！というのがよく伝わってくる！

そこで思う。私たちが精神分析に携わる者たちが‘鯉キチ’ならぬ‘精神分析キチ(もしくは精神分析クレージー)’であることは如何にして可能なのかということ。私たちがメルツアーに倣うとしたら、まず何よりもその点だと思う。彼は間違いなく第一級の‘精神分析キチ’なのだから！そして思う。私などのように臆病で根っから慎み深い現実主義者というのはどんなものかしら。＜精神分析というものは、用のある人には用のあるものですが、用のない人には用のないものです＞といったクールな態度では所詮ダメだと自ら反省している。やはりとことん狂熱とっていいほどに、一筋にこの道を生きるといった熱情のある人、それがどんなに面白いのか、ワクワクするものかといった感動を語れる人。メルツアーのように！そうした人物こそ「日本精神分析学会」に求められているはず。精神分析の未来を担うこと、そしてその未来を次の世代に託すということは、この感動の有る無しでは大きな違いとなろう。すなわちそれがあってこそ、楽観が底支えされ、そして日本という国に根深く巣食う‘文化的DNA’なるところの「見ザル・聞カザル・言ワザル」(内的・外的)に敢然と闘うことへ向けて牽引されてゆくだろうから・・・この無明を突破したい。その願掛けを手携えて、この先われわれは独自の道を探して行かねばならない。長い道程になろう。私自らは、その‘路傍の石’の一つとしてあればそれでいいと思っている。

(2019/01/05 記)

■ 附記； ドナルド・メルツァー(1922-2004)略歴

アメリカのNew Jerseyに生まれる。ユダヤ人家庭で育つ。他に二人同胞(姉たち)がいて、彼は末っ子。イエール大学およびニューヨークのアルバート・アインシュタイン大学にて医学を修める。この間、the Bellevue HospitalのLoretta Bender病棟で選択科目を履修する。そこでは精神病的子どもたちとのパイオニア的治療が模索されていた。ここで初めて彼はメラニー・クラインの名前を知る。その後、Missouri州・セント・ルイスのワシントン大学で精神医学の訓練を修了する迄の間、最初のパーソナル・アナリシスを受けた。そこで自閉症児たちとの出会いがあった。それから児童精神医学の道に入ることを決心し、Mrs. クライン自身から分析を受けるためにロンドンへの道を模索した。当時彼はUS空軍に所属し、そこでは児童精神科医として勤務していた(専ら職員の家族のために)。やがて1954年にロンドンに配属されるポストに就いた。彼はクラインとの分析を開始し、そして間もなく軍役から解かれて、the British Psychoanalytical Society に於ける訓練が了承された。彼の成人の研修症例は、ハンナ・シーガルそしてハーバード・ローゼンフェルドからスーパーヴィジョンを受けた。それから彼は児童分析家としての訓練に入った。彼の児童の研修症例は、ベティー・ジョセフ、エスター・ビックそしてハンナ・シーガルからスーパーヴィジョンを受けた。やがてその後、彼はロジャー・マネーカールそしてウィルフレッド・ピオンと友情を結ぶことになり、彼らに大きく影響されるようになってゆく。

1950年代並びに60年代をとおして、the British Psychoanalytical Society に於ける分析的思考の豊饒さに大いに感化され、彼は訓練アナリストになった。そしてスーパーヴァイザーとしても極めて人気が高かった。さらには、タヴィストック・クリニックで訓練を受けていた児童サイコセラピストたちとの関係性も密になってゆく。そこでの訓練は、ジョン・ボウルビーから招致されたエスター・ビックによって創始されたもの。また、彼にとって意義があったといえるのは「the imago group」の会員になったこと。そこには著名な美術史家、哲学者および精神分析家らが集っていた。そして、彼は審美的経験についての関心を深めることになった。

彼の精神分析の著作は広範囲にわたり、彼の思想に世界的な関心が寄せられることとなる。そして海外での講演活動といった機会が多く与えられるに至った。1980年代の前半、the British Analytical Society との関係性が、その組織についての双方の見解の不一致の結果、破綻した。そして個人的にも感情的なしこりを残すこととなった。彼はオックスフォードに居住し、臨床活動を継続した。彼の思想は、ヨーロッパ各地で、また同様に南アメリカでも強い支持基盤を持った。この間彼は、タヴィストックで児童サイコセラピの訓練の任に当たっていた、彼の三番目の妻マーサ・ハリスをとおして児童サイコセラピストたちとの繋がりを維持していた。

2004年8月13日、逝去。メルツァーは、乳児の心の理解、その対象関係の情緒的発達、さらには性倒錯、自己愛及び自閉症の精神分析的治療といったことに殊更に秀でた貢献をした。彼の業績の広さと深さ、その心の深層を^{えぐ}抉り出す分析の天賦の才、心の原始的機能への繊細な感受性、それらが彼を世界中の精神分析学徒に求められるスーパーヴァイザーにしたといえよう。